

# 正尊

観世弥次郎作

ワキ 武蔵坊弁慶

シテ 土佐坊正尊

ツレ(判官) 源義経

子方 静

ツレ 姉和平次光景

同(立衆数人) 土佐坊郎等

地は 京都

季は 雑

「是は西塔の武蔵坊弁慶にて候。さても我君判官殿は。鎌倉殿より大名十人付け申されて候へども。内々御中不和になり給ふにより。心を合はせて一人づゝ皆下りはてゝ候。さても去年の正月木曾義仲を追討せしより以来。度々平家を攻め落し。此春亡ぼしはてゝ候。一天を静め四海を澄ます勸賞行はるべき処に。渡辺にて梶原が逆櫓の意見を承引し給はざりし遺恨により。我君を讒奏申し。御兄弟

の御中不和になり給ひて候。又鎌倉より土佐正尊と申す者。昨日都へ上つて候ふが。是は我君をねらひ申さん為めと聞き召され。急ぎ召し連れて参れとの御錠にて候ふ程に。唯今土佐が旅宿へと急ぎ候。如何に案内申し候。判官殿より御使に武蔵が参じて候。正尊は此屋の内に御入り候ふか。

「武蔵殿かやあら珍しや。まづ此方へ御入り候へ。

「承り候。先以て御上りめでたう候。是は君よりの

御使にて候。上洛のよし聞き召し及ばれ。何とて御伺候は候はぬぞ。鎌倉殿の御意も聞き召されたく候ふ間。急いで御参りあれとの御事にて候。

シテ「さん候宿願の子細候ひて。熊野参詣の爲めにふと罷り上りて候。昨日京着仕り候へども。路次より違例仕り散々の事にて候ふ程に。今まで遅なはり申して候。

ワキ「委細承り候。仰せはさる事なれども。唯今御供申せとの御事にて候。

シテ「畏つては候へども。今少し養生を加へ。必ず伺候申し候ふべし。

ワキ「いや／＼片時も早く国の御事をば聞き召されたく思し召せば。唯々御供申さんと。

シテ「是非をいはせぬ武蔵殿に。

ワキ「さしも剛なる。

シテ「土佐坊も。

地 「否にはあらず稲舟の。く。上れば下る事もいさ。  
あらましごとも徒に。なるともよしや露の身の。  
消えて名のみを残さばや。く。

ワキ詞 「如何に申し上げ候。土佐正尊を召し連れて参り  
候。

判官詞 「此方へと申し候へ。

ワキ 「畏つて候。此方へ参られ候へ。

判官 「如何に土佐坊めづらしや。さて何の為に上りて

有るぞ。鎌倉殿より御文はなきか。

シテ 「さん候さしたる御事も御座なく候ふ間。御文は参  
らず候。詞に申せと候ひしは。都に別の子細なく  
候ふ事。偏に御渡り候ふ故と思し召し候。かまへ  
てよく守護させ給へとこそ御錠候ひつれ。

判官 「よも左は有らじ。義経討ちに上りたる御使とこそ  
覚えたれ。

ワキ 「御錠の如く。大名共をさし上せられ候はゞ。宇治

瀬田の橋をも引き。都鄙の騒ぎと為つては悪しかりなんともし召し。土佐坊上つて物詣するやうにて。たばかりで討ち申せとこそ仰せ付けられ候ひつらめ。和僧に於ては此法師。手なみの程を見すべきなり。

シテ「あら勿体なや。たとひ人の讒言により。君こそ仰せ出ださるゝとも。さすがに武略の武蔵殿。さは有るまじきと申されてこそ。御兄弟の御中に。物

いひさがなき事あるまじけれ。まづ静まつて事のわけを。委しく聞き給へ武蔵坊。是は御諚にて候へども。何によつて唯今さる御事の候ふべき。いさゝか宿願の事の候ふ間。熊野参詣の爲めに罷り上りて候。

判官  
「梶原が讒奏により。義経を鎌倉へも入れられず。道より追ひ歸されし事は如何に。

シテ「其事は如何御座候ふやらん。身に於ては全く緩怠

あらざる趣き。起証文に書きあらはし。唯今御目に懸くべしと。

地「当座の席を遁れんと。土佐は聞ふる文者にて。自筆に是を書き付け。弁慶にこそは渡しけれ。

シテ「敬つて申す起証文の事。上は梵天帝釈四大天王。閻魔法王五道の冥官泰山府君。下界の地には。伊勢天照大神を始め奉り。伊豆箱根富士浅間。熊野三所金峯山。王城の鎮守。稻荷祇園加茂貴船。

八幡三所松の尾平野。総じて日本国の大小の神祇冥道。請じ驚かし奉る。殊には氏の神。全く正尊討手に罷り上る事なし。此事偽り是あらば。此誓言の御罰を中り。来世は阿鼻に。墮罪せられんものなり。仍つて起証文此くの如し。文治元年九月日。正尊と読み上げたるは。身の毛もよだちて書いたりけり。

地「もとより虚言とは思へども。文を振うて書いたる。

器用を感じ思し召し。御盃を下さるゝ。折節御前に。磯の禪師が娘に。静と云へる白拍子。今様を謡ひつゝ。御酌に立ちて花葛。斯かる姿ぞ類なき。

舞の袖。(静三段の舞)

静  
ワカ「君が代は。千代に一度るる塵の。

地「白雲かゝる山となるまで。山となるまで。く。

静「変はらぬ契りを頼む中の。

地「変はらぬ契りを頼む中の。隔てぬ心は神ぞ知るら

ん。よくく申せと静に諫められ。土佐坊御前を罷り帰れば。君も御寝所に入らせ給へば。各退出申しけり。(中入)

ワキ  
詞「如何に申し上げ候。唯今土佐が宿所を見せに遣はし候ふ処に。幕の内には矢を負ひ弓を張り。兵ども皆武具をし。唯今打つ立つ気色見えて。更に物詣の気色は見えぬよし申し候。

判官  
詞「本来覚悟の前なれば。何程の事のあるべきぞと。

ワキ「其まゝやがて御座を立ち。

静「静は着背長参らする。

地「義経之を召されつゝ。く。御佩刀を取つて静々と。中門の廊に出で給ひ。門を開かせ諸共に。寄せ来る勢を待ち給ふ。く。

立衆一声「白波と。よそにや聞かんわたづみの。深き心はある物を。

シテ詞「其時正尊駒しづくと打ち寄せて。大音上げて名

乗るやう。そもく是は鎌倉殿の御使。土佐坊正尊とは我事なり。九郎太夫判官殿の。討手の大将たまはつたり。とうく御腹めされよと。大音上げてぞ呼ばりける。

地「味方の勢は之を見て。く。あの土佐坊を討ち取らんと。我もくと進む中に。江田の源三熊井太郎。弁慶を先として。門外に切つて出づれば。寄手の兵渡り合ひ。をめき叫んで戦うたり。

ワキ詞

「其時弁慶表に進み。如何に土佐坊たしかに聞け。さても書きつる空起証の。罰を忽ち与ふべし。いざ一太刀と呼ばれば。」

光景詞

「大将討たせて叶はじと。好む打物ひつさげて。弁慶を目懸けてかゝりければ。」

ワキ

「天晴器量の仁体かな。さて汝は誰そと尋ぬれば。」

光景

「物其物にあらねども。正尊が内に名を得たる。陸奥の国の住人に。姉和の平次光景なりと。大音上

げてぞ名乗りける。」

ワキ詞

「実にゆゝしくも名乗る物かな。さては汝は土佐が郎等。我には不足の者なれども。志をば報ぜん」と。

地

「長刀やがて取り直し。く。無慙や汝手に懸けん。と。込む長刀を打ち払ひ。受け流せば又取り直し。ちやうと打てばはつたと合はせ。重ねて打つに打ち込まれて。何かはたまらん唐竹割に。二つに為つてぞ失せにける。正尊これを見るよりも。く。」

むねとの郎等数輩討たせて。今は叶はじと馬より  
下り立ち。乱れ入るを。義経打物取り直し給ひ。  
隙間を有らせず戦ひ給へば。静も諸共に切り払ひ  
切り払ふ。正尊叶じと引き立ちけるを。弁慶追つ  
詰め戦ひけるが。押しならべむずと組み。えいや  
と投伏せ。大勢取り込め縄うち懸けて。喜び勇み  
囚人を引かせ。御門の内にぞ入り給ふ。

底本…国立国会図書館デジタルコレクション  
『謡曲評釈 第八輯』大和田建樹 著